

# あしき



第 107 号

2021 年 1 月  
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>



当会、日本野鳥の会三重は2020年10月、紀北町 紀伊長島沖 大島で繁殖するオオミズナギドリに悪影響を与えている可能性が高いとして、同島に棲息するドブネズミ駆除を環境大臣に対して要請しました。

## 大島について

紀伊長島の沖合の大島はオオミズナギドリが繁殖する島です。面積は約9.8 ha、最高点 89.2 mの無人島で常緑樹林に覆われ、「大島暖地性植物群落」として、同島の植生は国指定の天然記念物になっています(図1)。

オオミズナギドリは夏に島に飛来し、地上に穴を掘り、卵を1卵産み。ヒナを育てます。ヒナは秋に飛べるようになり、海に出ます。京都府冠島での調査の結果では、その後、4年間は繁殖地に戻らず、海上で過ごします。オオミズナギドリの詳細については「しろちどり」105号の拙稿を参照ください(平井2020)。

この島にはカラスバトも生息しています。カラスバトは大島と同じく紀伊長島沖の無人島、鈴島に生息するとされており(堀内2014)、2019年の環境省の調査でもカラスバトの棲息が確認されています(環境省2020)。また、標識調査によると1982年にウチヤマセンニュウと推定される鳥が1羽捕獲、放鳥されています(注1)。当時はシマセンニュウの亜種とされていたので、記録としてはシマセンニュウとされていますが、繁殖期であり、ウチヤマセンニュウの可能性が非常に高いと思われます。ウチヤマセンニュウのその後の記録はありません。なお、ウチヤマセンニュウは志摩市、和具大島でも繁殖しており、2018年にも繁殖が確認されています(中村みつ子：私信)。その他堀内(2014)によるとハヤブサも繁殖しているとのことです。

武田は2001年に三重県環境県民会議の助成を受け、離島を調査した。その中で、大島に上陸しており、足跡からノウサギとイタチが生息しているとしています(武田2001)。

## 離島のドブネズミ

ドブネズミ(*Rattus norvegicus*)はオオミズナギドリの卵やヒナを捕食します。船に棲み着いていたドブネズミが接岸時に島に侵入し、棲みついたものと考えられます。世界各地の離島でもドブネズミが棲み着き、離島で繁殖する鳥の大敵となっており、駆除に取り組まれています。固有の飛べない鳥が生

## 目次

紀伊長島大島の鳥とドブネズミ	2
表紙の言葉	2
タカの渡り 2020年	4
記憶のなかの鳥たち～3話～	5
2020年秋のミヤコドリ～お帰りがなさいT7～	5
2020年のミヤコドリの飛来状況	7
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化	
—連載第22回ジシギ5種(タシギ、オオジシギ、 チュウジシギ、ハリオシギ、アオシギ)と近縁種ヤマシギ—	8
ほのぼの鳥さん Watching	
～ふわもふ巣立ちビナ～	14
野鳥記録	16
理事会報告	20
事務局だより	20
探鳥会予告(2021年1月～3月)	21
探鳥会報告(2020年9月～2020年11月)	22
ツイッター始めました	24
編集後記	24

## 表紙の言葉

ミヤマホオジロ

津市 平井 正志

静岡の清水にいた頃、鳥を見始めた。しかし、ミヤマホオジロは全く見たことがなかった。いるという話さえも聞かなかった。安濃へ移ってすぐにミヤマホオジロのオスを見た。数は多くないが、林の中でひっそりと暮らす冬鳥。西日本では比較的多いようである。朝鮮半島では繁殖している。西日本でもいくつか繁殖が見られるようであるが、拡大しているのだろうか？

息するニュージーランドの離島や、各種の海鳥の繁殖するスコットランドの離島ではとりわけ、精力的に駆除に取り組まれています。日本の海鳥繁殖地でも、ドブネズミによる被害は深刻で、京都府舞鶴沖の冠島、石川県能登半島沖の七ツ島大島、北海道南端、日本海の渡島大島などではドブネズミによるオオミズナギドリへの被害が報告されています。そのいくつかでは駆除が試みられています。駆除には毒餌を撒くか、あるいは毒餌を入れた餌箱を設置するなどの方法が取られています。



図1 紀伊長島沖の大島、背景は大台ヶ原山系

### 大島のオオミズナギドリの現状

大島でのオオミズナギドリの繁殖は以前から知られており、地元の漁師の間では魚群を教える鳥として「まとり」と呼ばれてきました(倉田 1971)。1982年には須川 恒により成鳥 14羽が捕獲、標識され、また、1983年には樋口 行雄によりヒナ 19羽が標識されています(注1)。しかし、その後標識調査はされていません。オオミズナギドリの巣穴の数は全数の調査が難しいので、一部を計数し、全数を推定しています。

また、巣穴入り口付近の落ち葉の堆積状況などから、親鳥が使用している巣穴を推定することができます。巣穴は1982年に須川恒により457と報告されています(須川 2010)。また、2019年の環境省の調査によると巣穴の数は726、そのうちオオミズナギドリが使用していると推定される巣穴数は219と推定されました(環境省 2020)。巣穴の数だけで、オオミズナギドリが減少しているか否かはわかりません。2019年9月の調査で巣穴約40をファイバースコープで調べてもヒナを一羽も発見できませんでした。ヒナが正常に生育していたなら、成長したヒナがまだいるはずの時期です。同時に設置したセンサーカメラにはネズミが高頻度で撮影されていました。

大島にはドブネズミの棲息が以前から知られていたらしく、2010年に田中川生き物調査隊によって生息が確認され、7頭が捕獲されています(著者不詳 2010)。また、2011年6月には12頭が捕獲されています(清水ら 2019)。2019年に撮影されたネズミはこれまでの調査で、離島で繁殖する海鳥のヒナなどを捕食するドブネズミである可能性が高い。2019年の調査結果から、オオミズナギドリのヒナがドブネズミの深刻な食害にあっている

可能性が極めて高いと考えられます。一刻も早い駆除が望まれるところです。

謝辞： 大島の生物に関する情報収集については紀北町生涯教育課 植村 敏行氏、および三重県総合博物館 佐野 明氏、および環境省中部地方環境事務所の協力を受けた。ここに謝意を表す。

注1： 標識調査データ利用については山階鳥類研究所の許可を得た(山階保全第2-106号)

### 引用文献

環境省(2020) 平成31年度 国指定紀伊長島鳥獣保護区鳥類生息状況調査業務報告書。環境省中部地方環境事務所、名古屋

倉田 篤(1971) 紀伊長島の鳥類。紀伊長島 清水善吉、梅村有美、山本和彦(2019) 熊野灘島嶼の哺乳類、爬虫類、両生類および植生概要。南紀生物 6:113-119.

須川 恒(2010)：1982年の大島(三重県紀伊長島町)におけるオオミズナギドリの巣穴分布調査 アルラ No.40: 20-27

武田 恵世(2001) カンムリウミスズメ(孫太郎)の繁殖する島の条件は？ 平成13年度文化財調査報告書。紀伊長島町教育委員会・文化財調査委員会、紀北

著者不詳(2010) 紀伊長島の大島 [https://blog.goo.ne.jp/tanakagawa\\_shinogi/e/e5e0dcfd54002deccd042561e7183a1f](https://blog.goo.ne.jp/tanakagawa_shinogi/e/e5e0dcfd54002deccd042561e7183a1f) (2020年11月閲覧)

平井正志(2020) オオミズナギドリの思い出。しろちどり No.104: 6-7.

堀内 弘(2014). 堀内弘大いに語る紀伊長島の海と鳥。しろちどり No.79: 1-4. および No.80: 1-3.



## 庭田山

今年もタカの渡りを観察に9月中旬から庭田山頂公園の展望台へ行きました。例年なら15日を過ぎるとサシバやハチクマが渡っていきませんが、今年は20日過ぎまでほとんど飛びませんでした。それ以降は20羽前後のサシバ、ハチクマが飛翔していき、ピークは9月29日、サシバ67羽、ハチクマ10羽、ノスリ15羽、クマタカ1羽が通過していきました。10月に入ると徐々にサシバ、ハチクマの数は減っていき、ノスリ中心になりました。

10月12日には渡りの観察を続けていた知り合いがハイイロチュウヒの渡りを目撃しました。通常、チュウヒ類の渡りは、ほとんど観察されていけませんので貴重な記録となりました。



庭田山・二ノ瀬峠を渡っていくハチクマ



庭田山で渡りが観察されたハイイロチュウヒ  
撮影：砂田 安俊

## 伊勢

伊勢地方は有志の方が伊勢のやすらぎ公園から観察されていて、このピークは9月30日、サシバ109羽、ハチクマ7羽が観察されました。詳細な記録は表を参照してください。

観察者：小坂里香・作田久春・高木正文・中西章・西村泉・濱屋勝則・廣共子・前田聡・前田シズコ（五十音順）

## 感想：

- とにかく少なかった。コースが変わった、それ以外ない。（高木）
- 伊良湖岬で飛ぶ数が少ないため伊勢に来る確率も低かった。ピークらしいピークもなく、太

表 伊勢タカ渡り（2020年）観察結果

月日	時間	天気	サシバ	ハチクマ	ミサゴ	計	備考
9月22日(火)	8:00~9:30	晴	0	0		0	
9月23日(水)	観察せず					—	
9月24日(木)	9:45~10:30	小雨/曇	0	0		0	
9月25日(金)	観察せず					—	
9月26日(土)	8:20~10:00	曇	0	0		0	
9月27日(日)	7:00~9:40	晴	2	0		2	
9月28日(月)	8:00~10:00	晴	0	0		0	
9月29日(火)	11:00~12:00	曇	2			2	
9月30日(水)	7:30~10:00	快晴	109	7		116	伊良湖岬 742
10月1日(木)	7:30~10:00	曇	0			0	
10月2日(金)	8:00~10:00	快晴	0			0	
10月3日(土)	観察せず					—	
10月4日(日)	8:00~10:00	曇	3			3	
10月5日(月)	観察せず					—	
10月6日(火)	7:00~10:00	快晴	4			4	
10月7日(水)	7:00~10:00	晴	51		1	52	南コース高い
10月8日(木)	観察せず					—	
10月9日(金)	観察せず					—	
10月10日(土)	観察せず					—	
10月11日(日)	7:50~10:00	快晴	10	2		12	真上 低い
10月12日(月)	8:30~10:00	曇	1			1	
10月13日(火)	8:30~10:00	晴	0			0	
合計			182	9	1	192	

平洋ルートは不作といえる。（中西）

- 全体的に少ないが9月30日はタカ柱を見ることができた。しかし快晴のため高度が高く、タカはゴマ粒のようだった。また10月11日は前日までの天候不良によりサシバが外宮の森で罅をとっていたらしく、突然低く現れた。（西村）



トラツグミ

### 第一話 夜明け前に…

かれこれ 30 年以上前の春だったと思う。その不気味な音は、まだうす暗い早朝 自宅の近い場所から聞こえてきた。ヒーヒー ヒー——。金属的で途中さらに高くなり、まるで笛のようだった。「だれかが笛を吹きながら通って行く?!」窓からのぞいて見たが誰もいない。

何日か経って「今日こそは正体をつきとめてやろう」と決意、音が聞こえ始めるとすぐに外へ飛び出した。しかし、あたりは何事もなかったようにシーンと静寂が広がっているだけだった。

「あれは何だったのだろうか?」ずっと心に引っ掛かっていたが、野鳥の会に入ってからすぐに謎がとけた。それは音ではなくトラツグミの鳴き声だった。

### 第二話 頭の上から…

冬の日没は早い。夕方 5 時はもう薄暗く、飼い犬を急かしながら散歩していた。電柱の角を曲がったとたん、何かが電線にぶつかったようなバサッと鈍い音がし、次の瞬間ドスンと黒いものが足元に落ちてきた。私も犬も驚いて飛び退いた。懐中電灯で照らして見ると、口から血を流したヤマシギが横たわっていた。入会して間もないころの出来事だった。

### 第三話 眩しい光のなかで…

数年前、タカ渡りの観察に出かけたが不調のため、とある海岸へ寄ってみた。秋晴れの海岸、波打ち際を歩く。前方のカーブになっている汀線で、何やらキラキラ光っている。双眼鏡で見ると、その光のなかを 4～5 羽のシロチドリが右へ左へと、楽しくダンスしているかのように走っていた。

キラキラと光って見えたのは、小さな魚。たくさんのお魚がピチピチ跳ね、シロチドリが小魚を捕まえているところだった。小魚は陸に打ち上げられて間もないらしく、元気に跳ねるたびに銀色に輝いて綺麗だった。「今日は天気がよく波も穏やか、なのに小魚はどうしたのか? 大きな魚にでも追われたのだろうか?」などとシロチドリが嬉々として浜を駆ける光景を見ながら、ぼんやり考えていた。そして「このまま進んだら、きっとシロチドリは海上へ飛んで行ってしまう」そう思ったら慌てて踵を返し後戻りしていた。

## 2020 年秋のミヤコドリ ～お帰りをさい T7～



2020 年夏のミヤコドリ越夏調査は 7 月 10 日に行われ、既報のように 9 羽であった (平井 2020)。秋のミヤコドリは 9 月に飛来しはじめた (本号別記事 p7 参照)。10 月 24 日に一斉ではこれまでの最高数、145 羽が記録された (表 1)。これは松阪港の防波堤の上に集合していたものであるが、県北部での高松海岸でもこの秋にミヤコドリの群れが時々観察されているので、ミヤコドリは伊勢湾全体を動いているものと思われる。

また、D. ドロフィーエフらによって 2019 年 7 月 15 日カムチャツカ半島西岸で標識され、昨冬伊勢湾西岸で越冬し、それ以降、行方がわからなくなっていたフラッグ T7 のミヤコドリは 11 月 14 日今井

光昌氏により安濃川河口で撮影された (図 1)。越冬地に帰還したようである。この鳥は夏、2020 年 7 月 15 日から 19 日まで、北海道道南、太平洋側噴火湾に面した八雲町遊楽部 (ユウラップ) 川河口に滞在した (図 1)。地元の野鳥愛好者が見つけ、山階鳥類研究所に通報した。当地はこれまで、ミヤコドリが飛来したことは無かったとのことである。それ以外での観察の情報は今のところない。

一方、T7 ミヤコドリと同時に放鳥された、フラッグ T6 の付いたミヤコドリについては、日本野鳥の会東京の川内 博氏から情報が得られた。それによると、約 40 羽の群れと共に三番瀬付近で 6 月から 8 月に観察され、越夏し、この秋も健在であるとの

ことである。ちなみに東京湾ではこの秋 2020 年 11 月 1 日になんと 511 羽が記録されている。着実に増加しているようである。

ミヤコドリでは 5 年目にならないと繁殖しようとしないうちがあると記載されており (Hayman et al.1986)。ほぼ同じ大きさの American Oystercatcher では繁殖年齢に達するのは 3 年から 4 年とされている (Hardin 2014)、ミヤコドリが繁殖年齢に達するのはおそらく 3 年目以降であろう。T7 がどこまで北に行ったか不明であるが、安濃川河口から繁殖地の、カムチャツカ西岸ハイリュースヴァ河口まで約 2900km、遊楽部川河口までは約 900km。カムチャツカまでの道のりの少なくとも三分の一くらいは移動した (図 1)。繁殖年齢に達しない若鳥は越冬地あるいはその周辺で過ごすことが多いのであろうが、一年目でも T7 は繁殖地へ帰る指向性を示したのであろう。一方、T6 は東京湾で越冬した。この違いは個体差によるものなの

か、あるいは越冬地の餌などの外的条件によるものであろうか。

ミヤコドリが越冬するのは内海の干潟や河口で、餌となる二枚貝の多い場所である。このような場所は本州太平洋側では三河湾、伊勢湾、大阪湾、東京湾、駿河湾等以前はどこにでもあった。しかし今では伊勢湾西岸、東京湾三番瀬くらいなのであろうか。それ以外は商工業のために開発されてしまった。また、数千羽のミヤコドリが越冬するという韓国での状況も気になるが、残念ながら詳細な情報はない。この冬も当会では 12 月から 2 月までで 3 回のミヤコドリカウントを予定している。結果は来号で発表できるであろう。さらに増加していることを期待したい。

表 ミヤコドリカウント(2020/10/24)

調査地	個体数
高松海岸	0
鈴鹿川河口	0
鈴鹿川派川河口	0
楠海岸	0
豊津～町屋浦海岸	0
安濃川河口	0
阿漕浦～御殿場海岸	-----
雲出川河口右岸～五主海岸	0
雲出川河口左岸～雲出古川	0
三渡川河口～阪内川河口	0
松阪港	145
金剛川河口	0
櫛田川河口	0
松名瀬海岸～村松海岸	-----
合計	145

注：T7ラベルの個体は発見できなかった  
 調査員：今井鈴子、今井光昌、片山賢一、近藤義孝、笹間俊秋、田中洋子、中村洋子、平井正志、前田聡、吉崎幸一（五十音順）



(上) 図 1. ミヤコドリの繁殖地、越冬地

(右) 図 2. 三重に帰来したミヤコドリ T7 安濃川河口にて 2020年11月14日 今井光昌 撮影

